

その2

十四歳で竹本春駒師匠の内弟子になったものの、厳しいお稽古が辛くて「帰りたい、帰りたい」と言う私をみて、母が「外にお稽古に出してください」と春駒師匠にお願いをしました。当時、女の人みんな行くお師匠さんもありましたけれど、本当に太夫として立つために文楽のお師匠さんにつけてください、と母がお願いして、春駒師匠に連れて行ってもらったのが、十代豊竹若大夫師匠です。今回のチラシの写真はその頃のもので、大阪四ツ橋の文楽座での竹本三蝶一座の公演です。大阪に行ってから初めての興行でした。

若大夫師匠は旗頭のえらいお方で、男のなかでもボリュームのある、豪快な義太夫を語られました。あまりに立派すぎて、うおうおうおうとどういう節を言っているのか、さっぱりわからぬ。もつと勉強心があれば、ここはフクリだとか、なにフシだとか調べられたのでしょうか、なにしろまだやる気がありませんでしたから。若大夫師匠はお目が悪いこともあって、勘がないんですね。私が高んだかわかっていないことも勘づいていらした。一年くらい行っているうちに、つばめ大夫（四代竹本越路大夫）に頼んでくるから、とおっしゃって、おかみさんに手を引いてもらってそこをお願いしに行ってくださいったんです。つばめ師匠は、自分より先輩のお師匠さんが頼みにおい

でになったので、びつくりされたそうです。目上の方に頼まれてはお断りもできないでしょうし、淡路にゆかりのある方でしたので、私が淡路出身ということで、ご縁があると受けてくださいました。あとで、若大夫師匠のことを「あのお師匠さんはすごいえらいお方やなあ。僕みたいところに頼みにみえた」とおっしゃっていました。

つばめ大夫師匠が、いろいろ克明に義太夫のいろはを説明してくださいったおかげで、これまで腑に落ちなかったことがわかってきて、これは本気で勉強させていただきたいなと、目が開きました。それが十八歳くらいのときです。目から鱗の落ちる思いだったのが、人物の位取りや職業によって語り方が違うという、基本的なことを教えていただいたことです。女性でも廓の人と町人の奥さんでは、着るものが違うように、言葉遣いや話し方が違う。傾城でもいろいろあります。町人の娘と御殿の娘でも違います。こういう位取りの人はこう、百姓はこう、と教えてくださいって、ああ、なるほどなど。そういうことを頭に置いたうえで本を読んでも、師匠の前に座れば、言われなくても済むことがずいぶんあります。

当時つばめ師匠は巡業が多かったので、帰ってみえて、お稽古していただけたときは、葉書が一本くるんです。「いついつ、何時に来なさい」とたったそ

れだけ。葉書をいただいたら、その時間にお稽古に行きます。前に座らせていただく、質問しないでもちゃんとやってくださるんですね。例えば端場【はば..一段の発端となる部分】のときはこれでいいけれど、立端場になり、切場【きりば..一段の中心となる切りの部分】になれば、自分で少し色をつけたりしていいとか。基本はこう、切場はこう、というポイントを教えていただいた。そうするうちに自分で会得する仕方がだんだんわかっていって、義太夫がどんどんおもしろくなってきました。

つばめ師匠は女の弟子は絶対とらない方だったので、私がお師匠さんのところに行っているということ、男のお弟子さんですら羨ましく思われたようです。私が義太夫を始めたのが戦後まもなくで、若手の女流が珍しかったこともあったのでしよう。たいへんありがたいことに、錚々たる名人と言われたお師匠さんが、次々に手を差し伸べてくださいました。当時私は春駒

竹本駒之助 女流義太夫一代記

竹本駒之助
女流義太夫一代記



師匠の内弟子で、つばめ師匠に教えて
いただいていたので、普通は何人
ものお師匠さんにお稽古していただ
くようなことはないのですが、文楽と違
って女流は、師匠の許しがあれば外に御
稽古に行かせていただけるものだった
んです。つばめ師匠にはあとで「君は
女だから幸せだったよ」と言われまし
た。つばめ師匠に厳しい稽古をつけて
いただいたことは、今の自分の宝となっ
ています。そして若大夫師匠がそうい
うご縁を作ってくくださったことに心か
ら感謝しています。

このような生活が、二四歳で結婚す
るまで続きました。



【写真】二〇一四年二月公演のチラシ

【編集部注】
チラシの写真は、駒之助師匠に当時のことを思
い出していただきながら、白黒写真に着色したも
ののです。袴や見台の房の色など鮮明に覚えていらっ
しやり、そのお話をもとに再現しました。

二月に語らせていただく『太平記忠臣
講釈』七段目「書置の段」は、春駒師匠
がお素人さんに教えていらつしやるのを
聞かせていただいて勉強しました。春駒
師匠は、綺麗な御殿ものではなく、普通
女流ではやらないようなものを、お素人
さんにも教えていたんです。「書置の段」
はそのなかの一つです。当時私は十八歳
くらいでしたか。つばめ師匠について、
義太夫を真剣に勉強させていたきたい
と心を決めた頃でした。

若い時は自分にはまわってこないだ
ろうと思っていた演目ですが、この年
になったからこそやらせていただける
かなと。きょう泉岳寺にお参りさせて
いただいて、物語がより身近に感じら
れて、もつと早くに来るべきだったな
と、つくづく思いました。

五〇分ほどの作品ですが、クライマッ
クスの「書置」の場面は短く、そこに
至るまで、喜内と重太郎親子を中心に
物語は進んでいきます。重太郎の妻お
りゑは、武家の嫁でありながら夜な夜
な河原に立って客をとりますが、それ
は隠していることですから、すべて自
分で収めておかなければならない。夫
が帰ってきて、自分の思いのまま「懐
かしい」と飛びついて行きたいところ、
それを隠さなければならぬ。すべて
発散することができないので、前回の
『和田合戦女舞鶴』のようにテンション
が上がっていかないのも大変なところ

です。また、重太郎が帰ってきたときに、
喜内の妻であるお婆さんがひとこと「誰
やらみえた」という、なんでもないよ
うなところが非常にむずかしく、春駒
師匠がお弟子さんを何回も直されてい
たのを覚えています。

K A A T に素晴らしい舞台を作って
いただいて、本当に感激しています。
今回も精一杯語らせていたきたいと
思っています。



【写真】竹本駒之助十五歳 竹本三蝶公演
大阪四ッ橋文楽座にて

駒之助師が語る『太平記忠臣講釈』七段目「書置の段」の聴きどころについては、「記者懇親会レポート」をご覧ください。
十代豊竹若大夫師匠、四代竹本越路大夫師匠のもとでの修行、春駒師匠と一緒に「お嫁入り」や、これからの世代に伝えたいことなど、
一代記はまだまだ続きます。今後もシリーズ公演にあわせ、続編をご紹介します。